

小特集「音声と情報処理」の編集にあたって

田中穂積* 佐藤昌貞** 平川博***

電子計算機技術の近年の進歩は著しいものがある。それとともに、電子計算機は、我々の身近な存在になってきている。電子計算機が、一般の不定多数の人に使われる機会は、今後ますます増大すると思われる。このことは、人間になじみやすく、効率的なマンマシン・インタフェースの実現が求められることにもなるだろう。人と人との対話で日常使われている音声をそのまま、人と電子計算機との対話に利用できるようにすることは、一つの究極の姿として、技術者の長年の夢の一つでもあった。これが、たやすく実現する問題でないことはよく知られている。しかし、そうした夢に向けての研究が、ねばり強く続けられている。

これとは別に、電子計算機を音声研究の道具として使う方向がある。電子計算機が、近年、音声学、音響学の分野に及ぼした影響は少なからぬものがある。音声の研究は、従来とは比較にならないくらい、電子計算機技術の恩恵に浴しているといえる。

最近では、基礎的で地道な研究成果で、実際に実用に結び付いているものもでてきている。しかも、最近の音声情報処理の主要な手法のいくつかが、我が国の研究者により生み出された、という経過もある。

そこで、本小特集号では、情報処理学会の読者層が音声専門家ばかりでないという点を考慮して、音声研究の現状と将来の展望がよく分るように、現在、第一線で活躍中の比較的若い研究者の方々に執筆をお願いした。

本小特集号は五つのセクションから構成されている。(1)個々の技術間の相互関連、最近の話題を含めた総合的な解説と展望、(2)音声の特徴抽出を中心とした音声分析手法、(3)音声合成出力、(4)単語音声認識、(5)音声を“会話として”理解するシステムの諸問題である。

なお、日本音響学会誌が、本年3月号で音声の特集号を発行している。より高度で専門的な最近の話題を知ろうとする読者は、それを読まれることをお勧めする。本小特集号が、この分野の研究に新規参入を目指す人々の指針の一助となれば幸である。

最後に、本小特集号にご多忙中にもかかわらず、短時間で原稿執筆を引き受けて下さった方々および企画するに当たってご討議、御協力いただいた石井常務理事をはじめとする編集委員の方々に厚くお礼申し上げます。

(昭和53年4月27日)

* 電子技術総合研究所

** 日本電信電話公社武蔵野通信研究所

*** (株)富士通研究所